

## 寿岳文章と読書

中 島 俊 郎

### はじめに

寿岳文章(1900-92)は稀代の読書家であった。詩人ウイリアム・ブレイクを主軸とするイギリス文学研究、書誌学から発した和紙研究、民芸運動の実践、向日庵本の出版、ダンテ『神曲』翻訳など諸領域を横断する学際的な存在である。このような人物はどのような動機で読書体験を重ね、何を習得し、成就したのだろうか。本稿の目的はひとりの知識人が追究した読書の軌跡をなぞり、そこに生れた文化変容の一端を描こうとするものである。

幼年時代、文章少年は読書とまったく縁なき日々であった。「新刊書や雑誌のインクの匂いなどたえて漂わない」農山村で生まれ育ったのだが、それでも家族の乏しい蔵書が本の世界へ誘ってくれた。数学科の中等教員を希望していた兄、敏一の書籍に動物学者、渡瀬庄三郎が書いた発光動物の著書、一戸直蔵いちのへの天文学書があり、挿入されていた色彩図版がいたく好奇心をそそり、内容は理解できなかったが、後年のホワイト『セルボン博物記』(1789)、ダーウィン『ビーグル号航海記』(1839)など自然科学的な文学に興味をもつ素因になったという。図版が視覚に訴える力は活字、文字よりはるかに強い。すぐ上の姉が雑誌『児童世界』を購読していたが、「寒月」という小品文を文章少年につくらせ大半を姉が書いて投稿したら、果せるかな「とにかく活字」になったという。小学校高学年、兵庫県の北海道といわれる不便な山村の寺の養子となり得度した。文学好きな友人と知り合い『膝栗毛』、『金色夜叉』などを愛読したが、蘆花の『自然と人生』は熟読しすぎて「民友社特有の安っぽい紙装本が崩れてしま」った。助法で手にしたお布施で月刊誌『日本少年』を講読するようになり、有本芳水の詩、竹久夢二の挿絵が放散する「甘い感傷」に「すっかり参ってしまい」、それほど遠く離れていない実家を想い望郷の詩を連作するようになった<sup>1)</sup>。

やがて真言宗立京都中学校では小説、詩歌、評論な

どの濫読をくりかえした。発禁になった宮嶋資夫みやじますけ おの『坑夫』をひそかに読んだ。『坑夫』は大杉栄、荒畑寒村が経営する近代思想社から自費出版された小説であり、ゾラの『ジュルミナル』と作風を比較した堺利彦と、ゴリキーの初期作品とともに論じた大杉栄の序文が寄せられていた。大正5年1月、発売と同時に発禁処分となり紙型まで押収されてしまった。美を希求し、自由と正義を愛する主人公石井金次は、『破戒』の主人公丑松と一脈通じるところがあるが、根っからのアナーキストの「危険人物」であり仲間から最後は撲殺されてしまう。こうした読書の放浪をへて、「いかに生きるべきかの問題を中心として私の真剣な読書遍歴が始まるのは大正8年の春、関西学院高等学部英文科へ入ってからのこと<sup>2)</sup>であった。

読売文学賞(1977)に浴したダンテ『神曲』翻訳は寿岳一代の業績であったが、すでに関西学院入学前後からダンテへの関心が芽ばえていた。よって、それは半世紀以上にわたる読書が涵養した訳業であったといえよう。どのような読書体験から翻訳が生まれていったのかをまず見ておきたい。そして寿岳は広範囲な読書からもたらされる思索、批評、読後感を、『瀬祭記』だっさいきという読書記録に詳しく書き記していた。公表を前提としていない読書録は、本の著者の人となりと対象となる内容をありのままに露呈させてくる。読者である寿岳自身も分析の対象となる。最後に蔵書から読書の在り方を省察しておきたい。個人の蔵書はその読書傾向を示すものであるが、それ以上に本人自身の思索、信条、信仰のみならず他者との交友を介在させた社会活動をも明瞭に伝えてくれる。「寿岳文章文庫」は寿岳の広範囲にわたる業績がいかに生まれたかを跡づけることができる<sup>3)</sup>。ブレイク研究に関連した膨大な文献、『神曲』翻訳するのに参照した資料群がいずれも目をひくが、海外にむけて日本文化を発信しようと切望していた寿岳の姿勢をも交友関係から浮きあがらせてくる。黙して語らぬ書物はかくも雄弁なのである。

## I ダンテ『神曲』翻訳への道

1965(昭和40)年11月,寿岳文章は神戸アメリカ文化センターで,自らの精神的成長に読書がいかに寄与したかというテーマをかかげて講演をした。講演の冒頭,読書が残したささいな片々でも心の隅に沈殿して,それが人の生涯を決する大きな影響力をもつ場合がありうると発言している。「本というものは,ちょっとした機会に何気なく読んだものであっても知らないうちにどこかに残り,そしてそれは読んだ人の一生に大きな影響を与えるものである<sup>4)</sup>という。

寿岳は具体的な読書体験を通じて,精神のひだにふれ成長の糧となった本を語っている。京都の真言宗立東寺中学校に在学しているとき,バルグソンの『物質と記憶』,『創造的進化』を読んだが難解すぎて全く歯がたたなかった。だが後者のなかで語られていたハチの本能に関する記述は文章少年の「心の中の奥底」に刻まれるところとなった。「ハチが木の幹へ針を差し込んで,その先に虫の卵を適確にとらえ,殺すことなく一種の冬眠状態にさせて,自分の子供のエサにするという本能世界の不思議さ<sup>5)</sup>に瞠目することになったのである。生物・遺伝学者,会田龍雄に生物学を教えてもらったのだが,進化論者,丘浅次郎の所説を「また丘がウソを書いている。ここはこう書いておけ」と小気味いいほど訂正していく会田先生はたちどころに文章少年の尊敬的的となり,ラマルクの用不用説,ド・フリースの突然変異説などを教わりダーウィン説と異なる考え方もあることを知り,さらに生物学に熱中するようになった<sup>6)</sup>。

その後,読書体験は文学世界へと進むのだが,「芭蕉精神が地で行なった」ような,島崎藤村の小品も含む全作品(とくに『春』,『桜の実の熟する時』)を愛読し,続いて『自然と人生』,『みみずのたわごと』などの徳富蘆花の作品群を「頭のなかにはっきり像ができるほど」読み込んだという。こうした「健全な文章」は若き精神の糧となったものの,やがて人生の煩悶を覚えるようになると,藤村,啄木では物足らなくなりトルストイへ惹かれていく。それはトルストイが「一個の人間としてより悩みが多い人間」と映ったからだ。因みに寿岳が最初に世に問うた本はトルストイの家出を描いた,寿岳自身の言葉を借りれば「トルストイを真に深く理解しようとする」翻訳書『晩年のトルストイ』(岩波書店,大正15年)であった<sup>7)</sup>。

やがて本と自己との対話を続けるうちに寿岳は悩め

る魂の彷徨を克明に記した『アミエルの日記』と逢着することになる。じじつ『アミエルの日記』は寿岳にとって人生に対する「格好の指針を与えてくれる名著<sup>8)</sup>となるのである。小説家,ブルーストはラスキンの読書論を例示しつつ,読書がもたらす対話性について,的確にその意味を指摘している。「読書は会話と反対に,われわれ各人にとって,他の一つの思想からコミュニケーションを受けるということ,それもたった一人で,すなわち,孤独の中にある知性の力,会話の中ではたちどころに散らされてしまう知性の力を持ちつづけながら,常に靈感をうけうる状態で,精神が己れ自身に向かって実り豊かな働きをつづけている最中に,他の一つの思想からコミュニケーションを受けることなのである<sup>9)</sup>,と。

では寿岳にとって愛読書とはどのような本なのか,つまりそうした読書がいかなる意味をもつのかを前述した講演のなかで雄弁に語っている。書物を読む場合,読了してしまった状態になってはならず,たえず「読んでいる」という現在進行形が望ましいと教示している<sup>10)</sup>。つまり「いつも心の中でくりかえし読んでいる本が本当に読んでいる本」であるのだ。寿岳にとって読書とは読み終えることなく現在をも持続していき,「心のなかに生き」つづける状態を指すのである。ダンテ『神曲』はまさに半世紀以上も読書の進行形が持続した本であった。

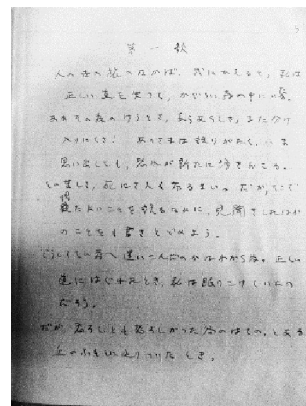


図1 『神曲』の自筆訳稿

寿岳がのこしたダンテ『神曲』詩篇の未定稿(図1),訳稿が掲載された雑誌の初出稿などを通じて『神曲』の翻訳過程をつぶさにたどることができるのだが,それは同時にダンテの関連文献をいかに読了したのかという問題をも照射してくれる。

寿岳文章訳ダンテ『神曲』は最初,歌人,宮柊二主宰の短歌雑誌『コスモス』に『地獄篇』第十二歌まで連載された。この雑誌には単行本にはない「小引」がある。それによると,「万葉集や詩経がいつもわが心の奥で律動しているように,ダンテの神曲がわが魂をゆさぶり初めてから久しい歳月が過ぎた」と訳者のなかで詩そのものが成長していった過程を明らかにしてくれている。『神曲』は若き日から「魂をゆさぶり」,

「心の奥で律動していた」詩、つまり読書の進行形を示す作品にほかならないからだ。訳業の経緯と動機が語りつがれる—「この春、さむぎむとした教壇を捨てる代わりに多年の念願である神曲の翻訳にとりかかることとなったのは、わが晩年の大きな喜びである。外国では、また戦後は日本でも、この世界的古典の新訳がつぎつぎと出た。神曲の場合、いかほど多くの新訳が出て、決して無意味ではないからである。私もまた意を安んじて、さらに一つを加えようと思いついた」<sup>11)</sup>という。

そして「小引」の最後に、『神曲』をどのようなかたちで訳出するか、その一端を語っている。「私はゆめダンテ学者ではないが、書齋はいつの間にか数十冊のダンテ文献を蔵するに到った。それらを博引傍証して註記を作ればきりがない。私は註釈を最小限にとどめ、いわばそれに基づいて神曲を講じ得る日本語での一つのテキストを作ってみたいと考える」と、学問的な訳注をほどこしながらも日本語として独立した詩文をつくりたいと念じている。そして詩人が詩神に祈りをささげて詩行をつむいでいくように、「詩霊よ、願はくは我に冥加あらしたまへ」と祈り、第一歌の第一行目をまず「人の定命のなかば、ふと気がつく私は暗い森をさまようていた、探せど探せど真すぐな道は無い」<sup>12)</sup>と訳出している。

まだ『神曲』が『コスモス』に訳出され連載されていたとき（図2）、『東京新聞』（4月16日）は「大波小波」という欄で、「短歌雑誌『コスモス』に寿岳文章の『神曲・地獄』の翻訳連載がはじまり、この4月号で25回を数えている。実にゆっくりしたテンポで、まだ第六歌の途中である」と早くも翻訳の進行状態を伝えている。そして、記者について、「寿岳は英文学者だが、日本のダンテ学の推進役をつとめてきた上田敏、中山昌樹、竹友藻風などに代表される京都ダンテ学会の衣鉢をつぐ最後の人でもある」と指摘している。

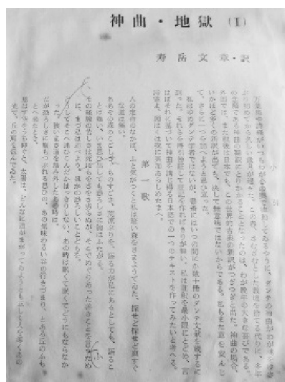


図2 初出誌『コスモス』

匿名で書かれた記事であるが、歴史的事実をじつに正確に押えている。加えて「今度の寿岳訳は一行一行の原意をできるかぎり正確に移し、しかも寿岳一流の平明で美しい日本の詩語をたくみに生かしながら、『神曲』の特色である清新体のスタイルを日本語によって再

生させることを旨としているようだ」<sup>13)</sup>ときたる完成稿を期待している。

また寿岳は『コスモス』（第19巻9号、1971年9月号）に「『新訳神曲』について」という一文を寄せていて、『神曲』と関わりはじめた契機を開陳している。文章少年が中学二年生の秋、白秋の『地上巡礼』（1914）が創刊され、同年十月に刊行された『真珠抄』、十二月刊の『白金之独楽』とともに、「田舎から出てきたばかりの少年の私を、詩の世界へひきこむ強烈な刺激と」なり、白秋の詩才を認めていたのが上田敏であることも知っていて、「『邪宗門』や『思ひ出』は、『海潮音』とともに、私の愛読書中の愛読書であった」と熱く語っている。北原白秋門下の歌誌『コスモス』ゆえ、『神曲』翻訳は掲載されたのである。やがて市井のダンテ学者、大賀寿吉（1870-1936）が「上田敏のダンテ学統を生か」してくれとの負託した「熱情の心」と、上田敏と親しく、『ダンテ神曲未定稿』を編纂した新村出の温情にも寿岳は浴したという<sup>14)</sup>。寿岳は英文学者で名高いブレイク研究者であるから、ブレイクを経由してダンテに開眼したように誤解している人が多い。むしろ逆である。

後年の『神曲』翻訳にいたる始点とも言うべき事件が東寺中学四年生のときに起きていたのである。それは文章少年の将来に決定的な影響を及ぼす文学的事件であった。上田敏の遺著『ダンテ神曲未定稿』が予約出版のかたちで出版された。『ダンテ神曲未定稿』は敏を追悼する二百四十一名が資を寄せ合い刊行をはかり、大賀寿吉、黒田正利がイタリア語原文と校訂したものであった。ちなみに敏は第一行目を「人の世の道のなかば、薄やみの森のなかにて、ふと気がついた。直なる道がわからない」<sup>15)</sup>と訳している。

当時の文章少年は郷里の寺からの学費はとだけ、自力で経済的な自立をしていかねばならない境遇であった。幸い学校当局から舎長に任命され、月額3円の手当てが支給されるようになり、また雑誌の懸賞などに応募して購書資金に当てるようになった。月にほぼ5円の生活費で暮らすようになっていたが、2円以上もする限定出版の形で刊行された『ダンテ神曲未定稿』は、とうてい少年の経済力に見合うものではなかった。出版の性質上かなり高価であったのは仕方がない。そこで一計を案じた文章少年は、一応それを若林書店から買い求め、一晩で筆写し、翌日また若林へ持参し、口実を設けて返品するといった苦肉の策を講じた。おそらく書店側は少年の熱意にほだされて、このような行為を許したのであろう。ほぼ60年後、この少年は



『神曲』を翻訳し、第28回読売文学賞に浴することになるのだが、『ダンテ神曲未定稿』の一件を覚えていた同書店の女主人は寿岳家を訪れ、祝いの品をたずさえ祝意を表わしたという<sup>16)</sup>。

学資かせぎにこの中学へ京大から教えに来ていた上田敏の門下生、百瀬清志(-1945)との出会いがあった。授業中に『海潮音』を話題にし、また敏からの直伝による海外文学思潮などを文章少年に伝えよこばせた。百瀬は将来、小説家を志望する文学青年であり、京大の卒業論文に詩人ダンテ・ガブリエル・ロセッティを選んでいて。寺で習字をしていて能筆であった寿岳に卒論清書を依頼するところなり、ふたりは急速に昵懇となった。下鴨にあった百瀬の家で文章少年は、生れて初めて「ライスカレーなるもの」を食したという。ただ、この未知の食体験同様に、文学においても新たな窓が開けはなれていたのである。卒業論文『ダンテ・ガブリエル・ロセッティ私考』の筆写から英文学の作品になれ親しむようになっていき、後年、「近代英文学とダンテの血縁的とも称すべきつながりの深さ知るに及んで、中学を了えたらいつかは上田敏について学ぼう、との私の英文学志向は決定的となった<sup>17)</sup>と述懐している。ここでもロセッティからダンテを結ぶ糸が見えてくるのである。つとに上田敏は、「[ロセッティは]『神曲』地獄界第五歌の翻訳は原詩を直訳することロングフェロウのに劣らず、しかも「テルザ・リマ」の押韻法を厳守しても毫も拘束せらるることなく、古今の絶唱を翻して婉美の調を伝えたるは驚嘆の他なしというべし<sup>18)</sup>とロセッティのダンテ翻訳を賞讃していたのである。文章少年が清書した卒論にはテキストとしてロセッティのダンテと周辺の詩人の翻訳を含む二巻本の詩集があげられ、参考文献としてマイケル・ロセッティの『ダンテとその仲間』が言及されていたと想像される。当時、入手できた基本的なテキストであったからである<sup>19)</sup>。

文章少年はすでに上田敏が明治34年に出版した『詩聖ダンテ』を熟読していた。その序文冒頭に高らかに記述されていた、「文藝の趣味は、広潤にして同情洽ねからむこそ望ましかれど、衷心の理想は、常に高遠雄大の傑作にむかいて、天才の鼓舞にみづからの進境を凶るべきなり。南欧の詩聖ダンテ・アリギエリの閱歴は、後人の志を励すべき崢嶸の一生にして、述作、また詩文の高潮に達す。靈妙の詩才、雄渾の知力、牢乎たる道念、劇詩の力あり、抒情の熱あり、叙事の巧あるもの、真に万古の秀什なりかし」といった文言は少年の琴線を強く打つものがあった。そして、その序

文は、「著者、今淺を強いて、『神曲』の紹介を敢てするは、一代学風の枯淡、没趣味なるに激し、人心一般の萎靡を慨して、文藝の尊威を知らざる俗流を斥けむとしてなり」と結ばれているが、まさかその当時、後年、みづからが畢生の訳業として『神曲』に対峙することになるうとは思わなかったであろう。ただ、翻訳が完成したとき、「詩聖ダンテの研鑽に精緻を尽くしたる基督曆第十九世紀を送りて、第二十世紀初年、はじめて絶東の文壇より遙に斯学の小著を捧ぐ<sup>20)</sup>という敏のことも甦ってきたはずである。

経済的支援にめぐまれなかった文章少年の生活は逼迫したが、『神曲』への想いは胸奥でひそかに燃えるともしびとなった。いかに烈しく世の冷たい風がふこうともその炎が消えつゝいえることはなかった。草深い農山村の貧しい寺で生まれた寿岳は明治、大正の頃、数多くいた苦学者であり、独学者であった。寿岳は神戸の押部谷、高和にある真言宗、龍華寺で四女二男の末っ子として生まれ、小林規矩王麻呂と命名されたが、十歳のとき、高野山真言宗、石峯寺の塔頭である竹林寺の養子となって寿岳姓となり、十一歳で得度して文章と改名した。その名前は、弘法大師の精神的自伝『三教指帰』の冒頭にある「文の起り必ずゆえあり、天朗らかなるときは象をたれ、人感ずるときは筆を含む」を典拠にしている。そして長じた文章は名が体を表わすようにと自らを律して、「文章は千古の事、得失は寸心知る」(杜甫)という句意とともに、「質、文に勝てばすなわち野、文、質に勝てばすなわち史」(論語)という言葉も肝に命じ、「質」つまり先天的な素養、性格、そして「文」という後天的な知識、教養をいつまでも忘れまいと心に誓ったという<sup>21)</sup>。じじつ文章少年は努力をおこたらなかった。中学時代からポケットに入る自作のノートを用意し、表の頁に英語を、裏頁には訳語を書き込み、暗記につとめた。高等学校を卒業するまでにノートの嵩はほぼ五十センチにも達していたという。『神曲』への目に見えない第一歩である。

寿岳のなかでは『神曲』への熱情は冷めることはなかった。昭和初期、大賀寿吉が土曜日の午後、京都大学楽友館で開いた『神曲』をイタリア語で読む読書会にも参加していく。昭和10年の大晦日に、「ダンテを読まんとして果さず、来年は果さむ。全体と部分。線と点。歴史と今。不可欠なものとして」と自らの1935年度『日記』にしるし、『神曲』への渴望を訴えている。寿岳は天台宗の僧、恵心僧都こと源信(942-1017)とダンテを比較して、「源信の生きた時代は、末法思

想におののきおそれひれ伏す日本の中世であるが、ダンテは信仰と理性、中世と近世の境めに立って、過去・現在・未来の三世を、人間の汚辱と栄光を遠観する<sup>22)</sup>と考察している。『神曲』に『往生要集』を読み込み、過去の乱世と現在の社会を重層化しようとする寿岳の読み方は、恣意的な読み方を許さない激しさを加えていった。

寿岳に戦後に書いた『神曲』の日本語表現に関する一文がある。それは『神曲』の詩句に対する解釈をめぐるもので漱石批判となってあらわれた。漱石の「倫敦塔」の冒頭部分には『地獄篇』第三歌からの詩句が引用されている。漱石はケアリーが散文訳したテンブル古典叢書の英訳に依拠した。

憂の国に行かんとするものはこの門を潜れ。  
永劫の呵責に遭わんとするものは此門をくぐれ。  
迷惑の人と伍せんとするものは比門をくぐれ。  
正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初愛は、  
われを作る。  
我が前に物なし只無窮あり 我は無窮に忍ぶものなり。  
此門を過ぎんとするものは一切の望を捨てよ。

漱石が訳したダンテの詩篇は、この短篇にふさわしい華麗荘重な詞体である。だが、最初の三行が「この門を潜れ」と命令形になっているが、寿岳はダンテの原文には潜るか潜らないかその人に任せるといった命令形の自由意志はまったくない、と指摘する。なめらかな口調で訳されているからこそ、漱石の本短編は多くの読者をえたであろうが、原文にしたがえば、地獄へ行く人は「この門を潜らねばならない」のである。こうした命運の厳しさは漱石の口ざわりのよいロマンティズムからはほど遠いのではないかと糾弾した。この詩句がもつ文学的意義を、「ダンテはトマス・アクイナスの『神学大系』の教えるところに従って、万能の聖なる力（父）と至高の智（子）と至上愛（聖父）の三位一体の働きによって天地の創造がなされたと聞き神は正義の思いにかられて地獄の門をも作ったというのである」と説いている。ダンテの地獄には、甘えもなければ救いもない。『神曲』の文学的な深さはこの峻厳さからうまれてくるのではないかと、寿岳は断言する。そして、「描く者のパトスと、描かれる者のロゴスが、かほどまであざやかな自己顕現を対照的に行い得た例は少ないであろう<sup>23)</sup>」と結論した。寿岳はこうした内省を繰返しながら、ほぼ三十年後に第一行目の訳筆をおろすことになる。つまり世寿七十になり、

半世紀以上にわたり燃やしつづけてきた『神曲』を翻訳するという聖業にとりかかったのであった。その翻訳は同時代の作家にも影響を与え日本文学の文脈を豊かにしていくのである<sup>24)</sup>。

訳者自身が独自の観点から翻訳がなされたことを語っている。「キリスト教文学史上、最も美しい終末観が展開される天国篇至高天薔薇の座のくだりを訳するとき、私の脳裡には、密教で秘奥とされる曼荼羅のイメージがつねにあった。私の訳した神曲の日本語に、今までのとはどこか違うかおりがたきこめられているとすれば、その秘密の一つは、こうした点に求められるかもしれない<sup>25)</sup>」。明治以来、『神曲』翻訳はほとんどがキリスト教徒の手になってきたが、ここに初めて仏教徒による訳業をみたのである。

## II 『癩祭記』

寿岳は小中学生時代から断続的に、そして関西学院高等学部に入學する頃からは日々たえることなく日記を書きつづけ、死の床につく数日前まで膨大な量の日記をのこした。同じような日記として永井荷風の『断腸亭日乗』がすぐに思い起こされるが、ただ寿岳はこの有名な日記は発表を前提として推敲をこらしている作爲ゆえ、日記本来の記録性には疑問があるとして退けた。よって記録性という観点から『サミュエル・ピープスの日記』（1660-69）よりも『ジョン・イーヴリンの日記』（1641-1706）を尊しと考えて上位においた。日本の作家の日記では、戦中から戦後の動乱期を文学者として生き自らの内実を克明に記録し、加えて時代相を忠実にとらえた『高見順日記』を高く評価している<sup>26)</sup>。成人する前後から寿岳が日記をつけ出したのは感銘をうけた『アミエルの日記』の影響が深い<sup>27)</sup>。人生の諸問題に直面し生きることに煩悶していた思春期の寿岳は、日記のなかで人生に呻吟し哲学的な思索を重ねるアミエルの姿に自らを重ねたのであった。

寿岳は二十歳前後に木村毅が翻訳した『アミエルの日記』前篇（春秋社、1921〔大正10〕年）を手にした<sup>28)</sup>。日々をほとんど思索と読書にささげた『アミエルの日記』を見出し、以来、「この孤独なスイスの哲学者は、わたしの心をひいてやまず」、ハンフリー・ウォード夫人の英訳を底本とする英語教科書まで編纂したほどであった<sup>29)</sup>。寿岳にアミエルは「お前のなかにいつも神秘の居場所をもたせておけ」と語りかけてくる。この断章が訴えてくる意味を「人間至上主義的な思いあがりやを馴致せよ」と寿岳は解釈し、結果、「人間のゆ

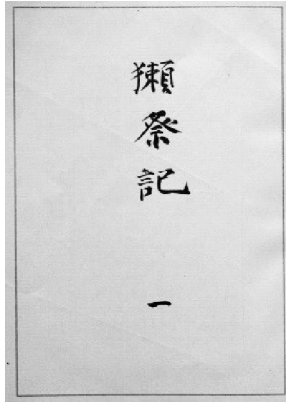


図3 『獺祭記』扉頁

ある『獺祭記』(図3)に受け継がれ自己との対話となり、また他者への批判、共鳴となり書物との対峙が全面的に反映されている。寿岳は戦前の第一書房が出していた自由日記を利用して、読んだ本に対する批評、感想、また著者に対する評価、個人的な意見などを書きしるした。昭和18年から昭和43年まで401冊を読書対象にした『獺祭記』はきわめて特異な内面の記録であると言わねばなるまい。「獺祭記」はカワウソが捕らえた魚を並べおく様子を、供物を神に供えているように見立てた中国の故事「獺祭」にならい、転じ学者がまわりに典籍を広げるのをこれにたとえた言葉であるが、獺祭には詩文を作るときに多くの典故の語をならべるという意味もある。学者として、また文筆家として寿岳が依拠した意味は後者にもとめられよう。なぜなら寿岳は獺祭記を自らの精神的成長の記録として考えていたのだから。同一の本を読了した反応であっても同じであるとは限らないという。「同じ書物を、何年か、または十何年か隔てて、再び三たび読んだ場合のもまじっている。それらの感想を読みくらべてみると、自分の読書歴の年輪がまざまざとわかるようで、真に興味深い。前にはつまらなく思えたものが、実はそうでなかったという発見があったり、逆に、若いころ感激した箇所が案外に空疎な内容だとうけとられたりする<sup>31)</sup>」というわけである。また『獺祭記』は人生経験の追跡ゆえ、生きてきた軌跡でもあった。だから記録された読後感も人生の索引にもなったのである。

寿岳文章は生涯、読書という営為を通じて人格形成をはかってきた。読書は寿岳にとって精神の鍛錬をなす上で大きな役割をはたしていたため、当然、本の読み方にも細心の注意をうながしている。「散漫な読み方をしたらせっかく読んだ本もたんなる印象批評的なものになってしまうと身につかないと思います。なぜこの本が心をひきつけたのか、どの点に自分がもっと

も多く心をひかれたのか、逆にどの点に反発を感じたかといったようことは、私はやはり読みながらメモしておく必要がある」と「読書ノート、日記」の必要性に着目したのであった。

記録は自己への内省、省察、批判を通じて個人の成長記録にも資する。書物に新鮮な態度でいどみ、その感想をできるだけきびしく「読書日記」「読書ノート」に書きしるす。初めての感想と数年後の感想を比べ合わせ、いかに自分が変わったか、成長したかを検討してみる。「かつてはたどたどしい自分だったけれども、この年月の間いろいろ人生の体験もし、生活の苦しみにも耐え、社会悪にたいしてもたたかかってきたその結果が、この本を読む上でこれだけ自分に深みを加え、新しい目を開かせてくれたのかということが、そこで自分に借り物でなしに与えられる」のを知ることができ、つまり読書をこのように重ねていくと、「私たちはより多くの自信をつけることができる」ようになり、書き重ねてきた「読書日記」は自分たち自身の「生けるしるし」となるとした<sup>32)</sup>。

開戦の前年に寿岳は自戒をこめて、読書にひそむ陥穽に注意を向けている。八紘一宇という語句の意味の改変にみられるように、「古典を読みすすむにつれて近ごろますます強く感ずるのはどうかすると『今』の眼で古典を見ようとする危険だ」と注意を喚起し、「古典の中の語句の抹殺や改竄が近来特に多くなったように思われる」と戦時に迎合しようとするような恣意的解釈は慎むべきであると指摘した。「古典への敬意と信従が最も薄らいだ時代」と戦時の、古典に対する安直な態度を寿岳は強く糾弾する一方、「古典をすべてそのあるがままの姿で肯定する柔軟で従順な態度」こそ古典の正しい読み方だと推奨したのである<sup>33)</sup>。『獺祭記』はまさにこうした平常心をたえず維持しようとした読書人の記録であると同時に、『獺祭記』は個人の読書記録を超越して、読書が織りなす時代相を伝える文化史にもなりえる可能性が大いにあるゆえ早く翻刻が望ましい。

さて、ひとりの読書人の精神的な展開をうかがう意味でも『獺祭記』はきわめて興味深い軌跡を示す。たとえば英文学者、福原麟太郎(1894-1981)は『獺祭記』のなかで、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)に次いで多くの著作がとりあげられている読書対象である。1968(昭和43)年、福原は専門のイギリス文学研究(エッセイスト、チャールズ・ラム[1775-1834]の研究者でもあった)に加えて、人間味あふれるエッセイが評価され、「英文学を基盤にする随筆一般」の文



業により文化功労者に選ばれている。ところが当初、なぜか寿岳は福原の随筆を一貫して『獺祭記』のなかでは全面的に否定していた。昭和18年8月21日、福原の随筆集『新しい家』（研究社、昭和17年）の読後感を、「英学界の一角に、福原随筆を讃美する者がいるが、なさないことである。高貴なところ微塵もなし。本人は淡々としているつもりだろうが一皮むけば鼻もちならぬ」と徹底した酷評を下している。その後も福原の著作に対して同様な負<sup>マイナス</sup>の評価が続くのだが、やがて評価が変っていく。そして否定から肯定への転換点を訪れる。「福原さんについていつも感心するのは、新聞や雑誌から頼まれて書かれたものを、一冊の本にまとめてみると、まるで名人の棋譜のようなあざやかな布石のあとを示すことである。こまやかな神経がすみずみまでゆきわたり、知見の範囲も実に広い。それでいて少しの（学者としての知見の）無駄も気どりもなく、誰にもよくわかる言葉で、淡々と書きつづられる。福原さんのこうした随筆を、いつか私は達人の至芸と評した覚えがある」と絶賛して、「何でもないことを書いているようで、福原さんの随筆には、いつも奥行き<sup>34</sup>の深さがある」とその世界の豊饒さを認めている。さらに『獺祭記』には福原の新刊『日本の空の下』が論評されている—「氏の随筆作法とも云うべきものの秘儀を公開したような随筆集」（1966年11月29日）と賞讃し、一定の評価に落ち着くのである。

さて1983（昭和58）年、彌生書房から「現代の随想」という作家、芸術家、研究者などによる名随筆の集成が出版されたが、第一期全15巻のなかには川端康成、小林秀雄、志賀直哉、堀辰雄らとともに『福原麟太郎集』がある。そして第二期全15巻のなかに齊藤茂吉、新村出、正宗白鳥、吉田健一などととも『寿岳文章集』が入っているが、その巻末は福原麟太郎を追悼する文章で飾られているのだが、同時に両者の関係をたぐまず総括している。寿岳は福原を、「日本の近世英文学界が産んだかけがえのない偉材であり、英文学の気風を地で行く象徴的存在だった」と悼み、「誰にもわかる平明な言葉で、人生や文学の醍醐味を伝達する言わば世界市民性が、福原さんの骨格となっていた」と福原の文業を分析し、「ジョンソン博士やチャールズ・ラムを愛すると同時に、ヴァージニア・ウルフにも共感する人間味ゆたかな福原の実存、学問への関心は全く無く、文士・吉田健一の価値を最も早くから認めた福原さんの人間と学問の山系の高さ、水脈の深さ、裾野の広さ」と人間性と学問が融合した福原麟太郎という存在を全面的に称揚した<sup>35</sup>。

雑誌『英語青年』は「日本の英米学者—学風と方法」という特集を組み、外山滋比古（1923-2020）が福原麟太郎を論じた。外山は福原の研究者としての従来の評価とともに、社会から孤立しがちな研究分野を世間一般の知見と融合させ活性化した点を高く評価した。「友として楽しむべき英文学が先生によって発見されたとしてよい。研究される英文学はその中に包まれるものである。わが国の英文学研究者にとって『愉快で有益』な英文学は姿を消してしまっているように思われる現在において、福原英文学の立場は改めて大きな意義をもつ<sup>36</sup>」とした。外山の見解は寿岳の評価と軌を一にしている。

戦後、寿岳は新聞、雑誌に2300篇以上の記事を寄稿・発表し、旺盛なジャーナリズム活動を展開した。こうした文筆活動の礎には英文学から学んだ知見が肥沃な養土となっていた。そうした寿岳にとって学問と人間性が一体化された福原は見上げるべき先行者であったといえよう。

### III 寿岳文章文庫

将来、寿岳本人は自らの蔵書が一括して文庫として保管されることはないかと絶望していた。心ひそかに寿岳は他の学者と同じように、蔵書の行く末に心を痛めていたのであった。学問、研究のため、若き頃から経済的に切りつめ粉骨砕身の想いで蒐集した蔵書である。寿岳は自らの蔵書の未来を案じつつ、「学者と蔵書」と題した随想を『朝日新聞』（昭和32年11月2日）に寄稿している。それによると蔵書だけが唯一の財産としてしか遺らない学者ほど「みじめ」な存在はないという。せめて遺された蔵書が故人ゆかりの学校に評価され、暖かく保存されれば、「故人の亡魂もうかばれる」とした。だが現実では「気持ちよくそのようなヒューマニズムを実行してくれるところはまずあるまい。強く訴えたい問題の一つである」と、愛着ある蔵書の将来を案じ個人図書の問題に心を痛めていた。しかし本人の悲嘆に反して膨大な寿岳の書籍群の大部分は甲南女子大学図書館に「寿岳文章文庫」（図4）として収蔵されたのである。

蔵書に関しては以前から寿岳は自らの



図4 寿岳文章文庫

図書を適宜処分し、新陳代謝をはかり本が生きるように活性化していた。売却する最大の要因は1万冊を収蔵できる書齋に併設した書庫が許容量を超えてしまい、あふれ出したためである。英文学関連の研究書は、その都度、京阪神の古書店へ引き取られていった。処分された本は、著者名、題目、売却価格が図書原簿、リストに記録されていた。早くは京都大学図書館長で、師事した新村出を介してイギリス文学者、作家の書誌関連文献を京大文学部研究室へ納入している。また寄贈された例も多い。11世紀のペルシャ詩人オマル・ハイヤームの詩集『ルバイヤート』関係書は京都外国語大学へ、仏教書は大谷大学へ寄贈すると明言していた。膨大な和紙関係の資料・文献は、没後、遺族により杉原紙の発掘で縁故があった兵庫県多可町にある「和紙博物館」に移譲され、「寿岳文庫」として収蔵されることとなった。また図書館長をつとめた甲南大学図書館にも「寿岳文庫」があり、寿岳が出版した稀覯本を中心に構成されている。1975年、民芸運動の盟友であった柳宗悦から献呈、寄贈された私家版を除き、ほぼ全蔵書7020冊が甲南女子大学図書館へ収容され、「寿岳文章文庫」と命名された。学者の蔵書は何を語り、本が放ついかなる現象を、また本がもたらす展開をどのように示唆してくれるのであろうか。寿岳はイギリス文学研究、ダンテ『神曲』翻訳はもとより、和紙研究にいたるまで幅広い業績をもつ学者であった。

収蔵された書籍の一冊一冊が語りかけてきて、かつての主の人間性が浮かび上がってくるのは言うまでもないが、加えて知友、友人との交流を通じて献呈された本が合わせ鏡となり、異なる視点から著者、贈呈者の思索の形跡を、また人柄をより深く知らしめてくれよう。その意味で寿岳への寄贈本は重要である。寿岳が甲南大学へ招聘した詩人D.J.エンライト(1920-2002)から贈られた多くの詩集には寿岳の家族への献辞をそえられていて詩人と家族ぐるみの交際があった事実が示唆されると同時に、詩人が研究者としての寿岳を高く評価していたことも判明する。また関西学院の校歌作詞を依頼したのが契機となって友誼を重ねた

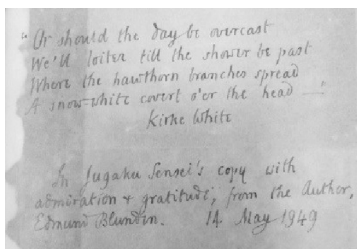


図5 ブランデンの献辞

詩人エドモンド・ブランデンが、作家ヴァージニア・ウルフが経営する出版社ホガースプレスから出した自然文学を追究した名著『イギリス文

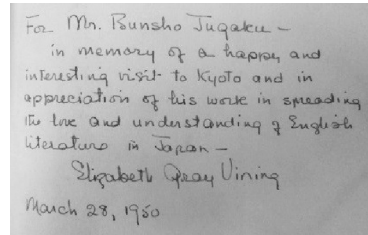


図6 ヴァイニングの夫人献辞

学における自然』(1927)には美しい文字で献辞がしたためられているが、寿岳が翻訳した『セルボンの博物誌』(岩波文庫)にブランデンが寄せた序文を知るとき、献辞(図5)の意味はさらに精彩を帯びてくる。また戦後、皇太子殿下の家庭教師をつとめ、詩人ジョン・ダンの伝記作家として知られるヴァイニング夫人(1902-99)が寿岳に贈った限定本『ドン・キホーテ』とそこに寄せた言葉(図6)は友情を忘れがたいものにし、寿岳が制作の労をとった芹澤銈介の『絵本どんきほうて』(1936)が介在した事実を想起させる。柳宗悦とともに民芸運動を推進していく伴走者となる前、柳は寿岳にとってブレイク研究の先行者であり、関西学院に提出したブレイクをテーマにした卒業論文には柳への学恩が明記されている。柳の大著『キリアム・ブレイク』には「1927年5月29日京都にて」という寿岳への献辞があり、「神は我らのあるごとくになる、我らが彼のあるごとくになる」というブレイクの詩句が添えられている<sup>37)</sup>。それは両者の親交が始まった時期を明確にするものであるが、やがて研究誌『ブレイクとホキットマン』(24冊, 1931-32)を柳と共同編集していたとき、寿岳一家はチフス感染のため長期入院を余儀なくされたが、柳は寿岳の論文を集め『ブレイク論集』(1931)を編纂して経済的支援をはかった。両者の友情は深まり、やがて「人間というものはこんなに親しくなんでも打ちあけられるものかと思われるくらい」<sup>38)</sup>交際していくようになる。敬愛する河上肇と同じく、柳は人生の伴走者であった。

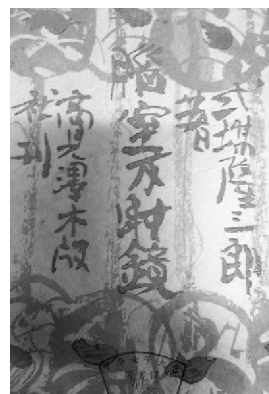


図7 『脳室反射鏡』(棟方志功装画)

日本人の著者としては精神科医にしてゴッホ研究者として知られる式場隆三郎(1898-1965)の著作が数の上では群を抜いている。寿岳への献辞がある『脳室反射鏡』(図7)にはふたりの友情を垣間見ることができ。昭和2年頃、式場が寿岳を知ったのは機関誌『木喰五行上人の研究』



を編集していると、新入会員の名簿のなかに「寿岳」という見慣れない姓名を見出した時であった。柳宗悦からブレイク資料提供を依頼された式場は手もとにある関連書を寿岳へ送った。昭和4年、『キルヤム・ブレイク書誌』は出版されたが、式場は一目見るやその書誌に惹かれ、自分も同じような本を出したいという想いがつり、『ファン・ホッホの生涯と精神病』（聚楽社、昭和7年）という大著を書誌学的研究（寿岳は本文よりも書誌部分を評価している）とともに出版する。寿岳の向日庵本の独自性を知悉していた式場はモリスの模倣だという一部の非難をしりぞけ、「寿岳君はモリスを研究し、モリスを尊敬している。だが、世間にある自稱豪華版のように、形だけの模倣ではない。寿岳君がモリスに学んだのは、外形よりもその精神だ。実際の造本に際しては、あくまで独自のものをつくっている。殊に東洋的な材料のよさを活かすことに努力している。数年来、寿岳君が和紙の研究に精進しつつあるのは、向日庵私版のような実際の仕事から生まれた必然的な結果である」と指摘し、向日庵本の美しさが美意識のうえに築かれた和紙研究の研鑽があって初めて成就するものであると明確に結論した<sup>39)</sup>。

寿岳が参画した『モリス記念論集』（1934）の書評を式場が熱をこめた筆で書き<sup>40)</sup>、両者の友情は本造り、出版を軸として展開していく。昭和9年、式場が翻訳した『テオ・ファン・ホッホの手紙』が限定200部で向日庵本として出版され、また式場の精神病理学を追究した代表作『二笑亭綺譚』（昭和14年）に寿岳は長い英文の序文を寄せている。

静岡県立病院の院長をしていた式場は、千葉県市川に自身の病院を建てようとしていた。だが建築中、用意した資金がつかず借金にゆきつまずき寿岳のもとへ借金を頼み込んだ。柳を含め民芸運動の仲間も金を貸さなかったが、寿岳は自宅の家屋と土地を抵当にして必要な金額を用立てた。全額を期日に返済した式場は、窮地を救ってくれた寿岳に対して深く感謝し、病院内のバラ園に「寿岳の記念祭と称して、バラの咲くころ、わたしたち夫婦を毎年招待してくれた<sup>41)</sup>」という。このバラ園が開園して5周年を迎えた昭和32年5月、ローズ・カーニバルが開催され、馬車の市内パレードとともに高松宮などの皇族の臨席をみた<sup>42)</sup>。読書や書物がとりもつ縁から生れた友情であった。

師弟愛から寄贈された本が放つ物語も注目しておきたい。終戦直後、正倉院の御物を見ながら、教師である寿岳が何気なく発した、「文化というものはね、上昇機運にあるときは素朴な、たくましさがあるが、

いったん頂上にたどりつくと、必ず衰退へ向かう。だからその爛熟した文化のなかに、衰えてゆく病的な要素を見つけることが大切ですね」という言葉がひとりの学生の耳目をとらえた。朝日新聞論説委員となる、当時学生であった田村耕介は「時代の潮の流れが変わるたびに私は寿岳先生の言葉を反芻している<sup>43)</sup>」と述懐している。では寿岳はこの発想をどこから得たのであろうか。これは明らかに歴史家アーノルド・トインビーの歴史書から学んだ史観といえよう。後年に駐日英国大使館大使になるジョン・ピルチャー（1912-90）は寿岳に『歴史の研究』全12巻（1934-61）を贈りつづけた。寿岳宛ピルチャー書簡（1939年10月13日）にはトインビーの文明循環史観を分析した西洋と東洋の比較論がうかがえる。「寿岳文章文庫」にはピルチャーが漢詩を引用した寿岳への献辞をしるした、この歴史書全巻と関連本が収められている。

「寿岳文章文庫」は何よりも寿岳自らの精神史、学問の展開を雄弁に語りかけてくる。寿岳が読書の要諦と考えた、「本が読まれている現在形」をたえず示唆しているからである。

イギリスから日本へ寿岳が導入した書誌学は日本における書誌学の先駆的な意義があるが、その研究はまだ決定稿をみない詩人ウィリアム・ブレイク（1757-1827）のテキスト研究から派生し、日本各地に点在する紙漉村を訪ねて和紙研究に発展していき、衰亡しつつある手漉和紙の独創的な研究、保存運動の礎となった。そうした学問的な意義にかんがみて書誌学を追究した一冊の本から論じていこう。

寿岳自身の文学研究と並行して和紙研究が開始されていく学問的展開を確認できるという意味において、ロナルド・B・マッケロウの名著『文学研究者のための書誌学入門』（Ronald B. McKerrow, *An Introduction to Bibliography for Literary Students* [Oxford University Press, 1927]) ほど寿岳文章文庫のなかで重要な位置をしめる本はない。それは書物を大切に扱うことにかけては人後におちない寿岳が躊躇することなく縦横に傍線をほどこし、下線を強く引き（二重に引いている部分も多々ある）、自らの注記を日本語、英語で存分に書き入れた手沢本である。「索引」の前頁にある、本文の最終頁（p.350）の余白部には、「1930（昭和5）年7月13日、読了」とあり、「本書以上に魅力的な本にはこれまで出会ったことがない」とさめやらぬ感動が英語で書きつけられている。そして「書誌学への興味は本書によって喚起されたというべきか」（図8）と寿岳は自らの書誌学への「事始め」を追記している。

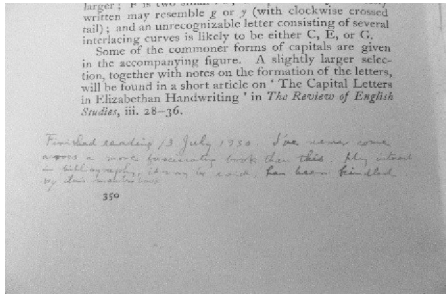


図8 最終頁への書き込み

本書を読了した記録と読書に没頭した感動の発露はきわめて大きな意味をもつ。まだ本書を読んでいる1930年6月21日夜、京都帝大英文学会の招きにより寿岳は学内の楽友会館の階上で書誌学に関する講演をおこなった。そして本書の読了後、講演のために準備した稿本をもとに詳注を付して『書誌学とは何か』（ぐろりあ そさえて）を著し、同年10月10日に出版した。新書版でわずか50頁足らずの小著であったが、わが国へイギリスの書誌学が本格的に導入された嚆矢となり、後世の書誌学的研究に及ぼした影響は深くて広い。

マッケロウの『文学研究者のための書誌学入門』の本文を前後して熟読しているとき、寿岳のなかでは書誌学という学問の骨格ができあがり、同時に講演をすることで本文の理解が深まり、「書誌学の常識がまだあまり行きわたっていないわが国の現状を顧みて」（「まえがき」）あえて公刊する次第となったのである。寿岳の大著『キリアム・ブレイク書誌』（昭和4年）を

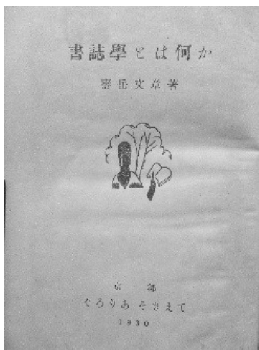


図9 『書誌学とは何か』扉頁

出版した、伊藤長蔵が編集長をしている同じ出版社「ぐろりあ そさえて」から『書誌学とは何か』（図9）は併行して出されたが、扉頁（タイトルページ）をみると出版地が神戸でなく京都になっていて、この出版元が神戸、京都を両拠点に活動していたことが分る。同じく扉には樹木のもとで本を読む読書人の姿があしらわれているが、この図版は寿岳の住居であった南禅寺、遷壺庵近くに住んでいて交流していた画家、船川未乾（1886-1930）の絵筆になるものであろう。

この書誌学の本は学問上の裨益をもたらすだけでなく、英国書誌学会への入会を果たすことになり、学問をより実践化させていった。この学会の会員になることを希望したが、入会資格には会員の推薦と「相

当な書誌学的業績」を要求されたのである。そこで博士に推薦してもらえまいかと直訴におよび、マッケロウ博士から推薦を取り付けたのであった<sup>44)</sup>。晴れて「未知白面の若者の熱望」が聞き入れられ「日本を代表する唯一人の会員」となった。1940年1月20日、博士は逝去したが、寿岳は「百万塔陀羅尼の印刷に関する研究」をその学会誌に投稿する準備を進めていた。だが、開戦とともに中断されてしまう。後年、「博士の教えが私の学位論文の中に一つの結実を得たことは、私のひそかな喜びである」としたが、それは京都大学へ提出した博士号請求論文であった。「現実に相見の機会をなくしてついに幽玄明鏡を異にしてしまったが、私の心の中には博士の姿が常に宿っている。私はあくまでも博士の衣鉢をついで、この国ではほとんど行く人もない書誌学の細くてせまい道を、よしや独りなりともわけ入ろうと思う」と学恩を語ってやまない。寿岳にとって、『文学研究者のための書誌学入門』は「学問的方向を決定した書物」であり、「今日に至るまで私の学問の方法論的基礎となっている」本であり、「全く新しい未知の学問の領土へ乗り出」させ、「学門の世界でこれほど感激を与えた書物は前後を通じて他にない<sup>45)</sup>とまで言わしめている。

寿岳の文学観以上に人生観まで大きな影響をもたらした詩人T.S. エリオット（1888-1963）の詩集、劇作品、評論はすべて架蔵されていて、関心の深さがうかがい知れる。じじつ、『荒地』（1922）を熟読してきた寿岳はエリオットへの偏愛を語ってやまない。またエリオットを追悼した文のなかでは、「インド思想への深い傾斜<sup>46)</sup>を示した詩人に注目した。関西学院で教えていた英文科でエリオットの詩に心酔する学生、野田理一（1907-87）を見出し、詩集『願はくは』（1935）を向日庵本の一冊として出す。野田の詩のなかにエリオットからはじまる新しい詩人たちの、つまり「オーデン、マクニースほかのいぶき」を認めた寿岳は、その詩が「日本の詩壇や英文学界にどううけとられるか、確認したかった<sup>47)</sup>という。寿岳の野田に対する信頼は厚かった。「現代英国のすぐれた詩人エリオットに対して野田理一君がささげた久しい間の傾注と沈思と尊敬とは、ついに同君をして英本国のオーデンやスペンダー以上にエリオットの本格を把握せしめた、と称しても過言ではないと私は信じます」（『向日庵消思』第五信）。寿岳宛野田書簡は、「お訊ねにあづかりました本の題名は『願はくは』とし、……素朴な装幀というような言葉の漠然さの方が、私と致しましては実は一番強く申し上げられることなのでございます」（昭和

9年12月13日)と師弟ふたりして本造りが進められているのを伝えている。英国の私家版ダヴズ・プレスを範とした。

すでに言及したように、寿岳には書籍を自ら立案し、装幀をほどこし、本文に使用する紙、印字を選定する造本家・出版者としての側面がある。「向日庵本」と称する、一連のブレイク詩集を翻刻した私家版は国際的な声価を今日でも保っている。そうした造本、出版を介した友人たちの寄贈本も逸してはならないであろう。たとえば戦前から昭和にかけて活躍した異色の作家、西川満(1908-99)から献呈された多くの著作がある。詩集『葛西橋の歌』、『模乳巷の歌』、『柿の歌栗の歌』、『西川満全詩集』、また長編小説『台湾縦貫鉄道』、小説集『双蝶記』(いずれも人間の星社)などが目を引くが、とくに西川が渾身をこめて造本した限定版『華麗島颯風録』(人間の星社、1981)は、家蔵本が寿岳に献呈されている。ここに著者西川満が寿岳によせた並々ならぬ敬愛を知ることができよう。草森紳一によれば、西川満は文人タイプの作家であり、「半プロ半素人半隠者で、中途半端さに自由を見出し、それでよしと思っているところがある。そういう中で、研究もし、物も書くが、書物を読んで喜び、書物そのものへの愛も人一倍強く、趣味性も大事にする」<sup>48)</sup>と的確に「本の人」を評価している。

寿岳に文学研究者のみをみる人には意外に感じるのだが、文庫には郷土史の類も少なくない。郷土史に寿岳は何を求めていたのであろうか。関西学院高等学部へ進学する前、寿岳は大阪心斎橋にある法案寺南坊で食客になっていた時期があり、大阪の町文化に関心を抱くようになった。文庫に収蔵されている雑誌『上方』に、娯楽が教養となり、ひとつの文化へと昇華させていった浪花の息吹を見出していたのである。「旧幕時代から明治期に継承されたユニークな町人文化の伝統が、『上方』百五十一冊には結晶している」として、「富水仲基(1715-46)や木村兼葎堂(1736-1802)を産み育てたのと同じ自由な空気が、『上方』のどの号にも横溢している」のを認めた。また「南木芳太郎(1882-1945)氏は、天成の名編集者であり、寄稿者の選択ぶりや企画の立て方に、氏のきびしくてしかも暖かないぶきが満ち溢れていた」と編集人の手腕を賞讃し、「その結果、硬軟雅俗、およそ上方文化のあらゆる面が、均整と節度を以て毎号とりあげられることになり、「肩のこらない楽しい町の風俗誌」だが、「高度の学問的考証の裏づけ」られていて、娯楽と教養の合体というもっとも好ましい雑誌が現出したわけであ

るとした<sup>49)</sup>。寿岳文庫はじつに多彩である。そして、「文庫」の蔵書は読書日記と深く連動している。

戦後、公表を意図していなかった、『癩祭記』の閉じられていた世界は、久山康が編纂し寿岳も参画した読書論を説く『読書の伴侶』(1952)へと脈動していき、その世界が開かれていく。寿岳は関西学院で同僚であった久山康(1915-94)と協働し読書を生活、思考の推進力にすべく読書の力をつける方法、工夫を推し進めていった。まず大正から昭和初期にかけて、教養層にあっては読書が知的生活において大きな地歩を始めていたにもかかわらず、第二次世界大戦の敗戦をまえにしていかに読書が無力であったかが自覚され猛省を迫られた。「日本人の読書の仕方については、根本的な反省を必要とする時が現在訪れている。それは、大正から昭和にかけての読書の仕方によって育てられて来た日本の知識階級の脆弱さと空虚とが、今次の戦争を通じて根底から明らかとなったからである」と久山は総括する。さらに戦後、読書には新しい陥穽がひそんでいた。「敗戦によって思想の自由が恢復されるや、世界の革命的気運の進展に呼応して、社会革命を唱えるマルキシズムが再び盛んになるとともに、戦争による破壊と解体を通してあらわとなった人間存在の虚無性に打たれて、ニヒリズムとその克服を問題とする実存主義が、一般に流行を見るに至った。そしてここに文化主義的な大正・昭和の教養の理念は、二つの側面より崩壊し、それとともに知識階級の全体的統一的な世界観及び人生観の喪失があらわにされて、そこには一面的な思想の無批判で過激な受容か、それとも虚しい思想のさまよいかが残されたのである」といった分析にみられるように、こうした思潮はなにも日本にかぎらず世界的なものであった。「しかし私達の祖国が、この混乱と破滅の中から立ち上って、真の建設に歩みを進めるためには、この精神的伝統の断絶と世界観の分裂に対して、正しい是正と解決が行われ、深い人格性と広い社会的視野をもった新しい人間の形式せられることが必要であろう」<sup>50)</sup>とされ、こうした現状を超越し読書が人間形成に資さねばならないという久山の論調には寿岳も深く組んでいた。

『癩祭記』のなかでわだかまっていた問題が『読書の伴侶』において尖鋭化されている。たとえば戦争に迎合した論調に賛同できなかった寿岳は、読書においても自らの態度を旗幟鮮明に表した。それは戦争を讃美した作品を発表した齊藤茂吉、高村光太郎の詩歌を受け容れることができず、「赤彦や憲吉は早く死んで、今度の戦争の試練を受けませんでした、茂吉は戦争



を通してボロを出しました。それは何かといいますと、世界史の動向に対して認識を欠いていた点です。これは高村光太郎も同じことです」といった厳しい口調で非難する一方、「日本の詩歌の伝統にその誘惑があるのだと思います。短歌は自己の苦悩の表現にはよいが、大きな歴史の歩みに対しては脆いのではないのでしょうか。その点十分考えなければならぬものがありますね」と短歌のもつ自己完結性、閉鎖性をも問題にした。

この発言を受けて、宗教哲学者、西谷啓治（1900-98）は、「私は茂吉がボロを出したというふうには、言いたくない気がします」と寿岳の意見に即座に異を唱えた。そこで寿岳は具体的に自らの立場を詳しく説明する—「私が茂吉はボロを出したと言ったのは、茂吉は青年期において西洋の詩の影響を受けた人であり、また光太郎も同罪と断じたのは、彼が渡仏してロダンのもとで学んだ経験をもった人であって、私は特に期待をかけていただけに、失望して強い表現を使ったのです」<sup>51)</sup>と西洋的な環境を知悉している作家ゆえに批判したのであった。

これ以前に寿岳と西谷の間には戦争に対する態度に眼に見えぬ差異、齟齬があった。西谷も参加していた高坂正顕、高山岩男、鈴木成高による座談会の記録『世界史的立場と日本』（中央公論社、昭和18年）の読後感を寿岳は『癩祭記』のなかで、「未熟で思いあがってこれらの連中の思索の脆弱さが、ごまかしがそれだけによくわかる。砂上樓閣遊戯の好見本」と横溢する戦争への同調、正当化する立場を強く否定し、「こんなことを真剣にもし考えていたとしたら、知性の恥だろう。おざなりなら学者らしく黙っている方がいい」（『癩祭記』昭和20年10月25日）と厳しく断罪している。「世界史の動向」云々という寿岳の発言は明らかにこの座談会を下敷にしている。「世界史的という言葉は、感動を表す言葉であるよりも反省を表す言葉でなければならぬ。この意味において僕たちはこの言葉にもっと充実した奥行きを与え思想的な深さをもなさねばならんと思う。それは学問の使命だ。大東亜戦争は世界秩序の転換の戦争として深い根底的な思想性をもっている。……今度の戦争の目的はきわめて明瞭であって、……東亜の新秩序のために戦っている。すなわち利害のための戦争ではなく、秩序のための戦争だ」と鈴木成高は戦争の正統性を説いていた（『世界史的立場と日本』、pp. 425-26）。かくのごとく『癩祭記』の論調は『読書の伴侶』にまで揺曳し共鳴している。

## 結びにかえて—蔵書と読書

寿岳はみずから選んで私立大学の教師となり、反骨の精神を失うことなく、在野の一学究として生きてきた。だが勤務校には専門書はもとより書物は皆無に近

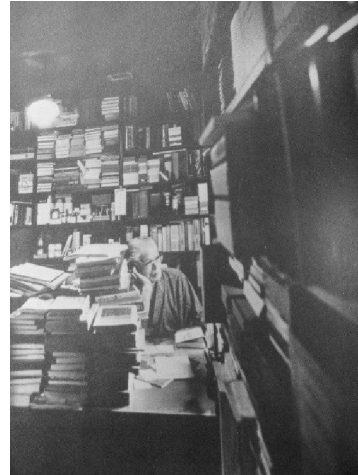


図10 書斎の寿岳文章

かった。そこでやむを得ず身分不相応の金を投じてまで本を購入した。独力で、やれるところまでやってやろうと意地もあったという。「その結果、英文学であれ、あるいは和紙研究であれ、必要な文献は私自身の手の届くところにあり、書庫とつな

がる書斎(図10)が、私の学究生活の牙城となった」<sup>52)</sup>という。

蔵書、書庫を円滑に作動できるか、否かはすべて分類によって決まる。寿岳は蔵書を管理する図書原簿に、受入年月日、登録番号、著者、書名、出版地・出版所、出版年、版数、版型(装釘)、受入れ先、価格などを記入している。本の副題扉に茶の実を図案化した蔵書印を捺し、茶の実の周辺のEX LIBRIS CANOPI(寿岳蔵書)とある欄の下方に、原簿に記載した同じ登録番号を書き入れる(今後、この蔵書印のデータベース化によって寿岳文庫の分析が可能になるであろう)。蔵書票は糊を選ばないと虫害を受けるので、朱肉による蔵書印を押した。ただしケルムスコット版級の愛蔵書には芹沢銈介が図案化した蔵書票を貼用するという<sup>53)</sup>。

このように組織化された書庫管理のもと繰り広げられた読書はどのような結実をみたのか。岡倉天心の著作に対する読み方が寿岳の読書の姿勢をよく示している。天心の英語著作『東洋の理想』(1903)の冒頭にある「アジアは一つなり」という言葉は英語として破格であると非難されてきたが、寿岳は「区々たる技巧の問題を超越した荘厳な理想がこの三語(Asia is one.)に要約されている」としてあえて非論理をおかした天心の真意を擁護した。結果、「天心は絶対に英米文化に追従することなく、常に自主的な衿持を以て

英米文化に臨んだ<sup>54)</sup>と評価したが、読書において自己本位にたつ態度はまさに寿岳自身についても言えることではあるまいか。

## 注

- 1) 幼少時の読書体験については寿岳文章「土蔵の二階で」(『明治文学全集明治詩集2』第61巻, 月報第85号 [筑摩書房, 昭和50年]) に詳しい。また中島俊郎「宗教的真理の探究」『向日庵』第4号 (NPO 向日庵, 2021年, pp.31-55) 及び「寿岳文章の軌跡」『向日庵』第5号 (NPO 向日庵, 2022年, pp.81-97) を参照のこと。なお本稿の第一章と後者の論考は重複している部分 (pp.87-91) があるので断っておきたい。
- 2) 寿岳文章「私の読書遍歴」『日本読書新聞』1954年6月7日
- 3) 個人の文庫が文化形成に寄与した例としては、ウォーバーク文庫 (Warburg Library) が最適であろう。Emily J. Levin, *Dreamland of Humanists: Warburg, Cassirer, Panofsky, and The Hamburg School* (Chicago: The University of Chicago Press, 2013), pp. 44-47, pp.64-65. 甲南女子大学図書館に設置された「寿岳文章文庫」のリサーチには、同大学文学部教授、米田明美先生、図書館司書、中岡妙子氏から多大なご協力を賜ったことに謝意を表したい。
- 4) 寿岳文章「私の読書歴」『神戸新聞』(昭和40年11月12日)
- 5) 寿岳文章「私の読書歴」
- 6) 寿岳文章『わが心の自叙伝』第1巻 (神戸新聞社, 昭和42年), pp.39-40.
- 7) 寿岳文章「若き日の読書」『神港新聞』(昭和32年10月12日), チェルトコフ, 寿岳文章訳『晩年のトルストイ』(岩波書店, 大正15年), p.2.
- 8) 寿岳と同時代では哲学者、深田康算が『アミエルの日記』を同じ読み方をしている。後藤嘉弘「中井正一の出版論」『出版研究』第30号 (出版ニュース社, 1999), pp.72-75.
- 9) マルセル・ブルースト「読書の日々」鈴木道彦編訳『ブルースト文芸評論』(筑摩書房, 1977), p.177.
- 10) 寿岳文章「私の読書歴」
- 11) 寿岳文章「神曲・地獄」『コスモス』第17巻4号 (コスモス短歌社, 1969), p.46.
- 12) 寿岳文章「神曲・地獄」『コスモス』第17巻4号 (コスモス短歌社, 1969), p.46.
- 13) 寿岳文章『「新訳神曲」について』『コスモス』第19巻9号 (コスモス短歌会, 1971), p.46.
- 14) 寿岳文章『「新訳神曲」について』
- 15) 上田敏「ダンテ『神曲』未定稿 地獄界A稿」『上田敏全集』第1巻 (改造社, 昭和4年), p.601.
- 16) 寿岳文章・池澤夏樹「ダンテ『神曲』はおとなの遊園地」『青春と読書』(集英社, 1987年6月号), p.13.
- 17) 寿岳文章「少年と神曲」『蛍雪時代』(旺文社, 1977年4月号), p.64.
- 18) 上田敏「ロッセッティの詩篇」『上田敏全集』第3巻 (改造社, 昭和3年), p.553.
- 19) William M. Rossetti ed., *The Collected Works of Dante Gabriel Rossetti* (London: Ellis and Scruton, 1886 [1874]), I, pp.443-77. William M. Rossetti ed., *Dante and his Circle with the Italian Poets Preceding Him: A Collection of Lyrics Translated in the Original Meters by Dante Gabriel Rossetti* (London: Ellis and Elvey, 1874 [1861]).
- 20) 上田敏「詩聖ダンテ」『上田敏全集』第3巻 (改造社, 昭和3年), p.82.
- 21) 寿岳文章「わたしの名前」『朝日新聞』(1967年3月19日)
- 22) 寿岳文章「神曲の今日性」『読売新聞』(1972年12月12日)
- 23) 寿岳文章「地獄の門」『おしぜみ』第5号 (大谷大学文学部, 1952), pp.3-5.
- 24) 「直喩」といわれる比喩だが、使い方によって、却って強い効果を出す場合がある。それを私は主にダンテの『神曲』から教わった」と述べ、寿岳訳から実例をあげている。「息せきあへぎ、安全な岸へ逃げ果せた海の泳ぎ手が、危険きわまりない波濤のさかまきをひと目ふりかえるやうに」(地獄篇第一歌)、「風をはらんだ帆が檣の折れるとき、わらわらとねちれ落ちるがごと」(同第七歌)。大岡昇平「翻訳しながら……」週刊朝日編『私の文章修行』(朝日新聞社, 昭和54年), pp.235-36.
- 25) 寿岳文章「神曲を訳し終わって」『朝日新聞』(1976年1月12日)
- 26) 寿岳文章「日記」『越後タイムス』(1968年1月21日)
- 27) 寿岳文章「アミエル日記抄」『英語研究』第17巻12号 (研究社, 大正14年3月1日), p.103.
- 28) 木村の協力者として津田英学塾の女学生が下訳をつとめたという。木村毅『私の文学回顧録』(青蛙房, 昭和54年), p.249. 同時に寿岳は平田禿木『最近英文学研究』から『アミエルの日記』の存在を知った。中島俊郎「寿岳文章の青春いかに人間形成はなされたか」『向日庵』第3号 (NPO 向日庵, 2020), pp.57-59.
- 29) 寿岳文章『アミエル日記選集 (*The Heart of Amiel's Journal*)』(平野書店, 昭和7年)。底本は, Henri-Frédéric Amiel, translated by Mrs. Humphry Ward, *Amiel's Journal* (London: Macmillan, 1855) である。
- 30) 寿岳文章「忘れ得ぬ断章—アミエルの日記」『週刊読書人』(昭和38年8月5日)
- 31) 寿岳文章「読書雑記」『学燈』第67巻11号 (丸善, 1969年), p.6.
- 32) 寿岳文章「読書体験を語る—一人間形成に果す書物の役割」(『文化評論』第118号, 昭和46年6月1日, pp.25-26.
- 33) 寿岳文章「古典をいかに読んだか」『文藝』第8巻6号 (昭和15年6月号)
- 34) 寿岳文章「天成の達人の至芸—福原麟太郎『英文学随筆』評」『週間読書人』(1964年12月14日)
- 35) 寿岳文章「福原麟太郎博士のこと」寿岳章子編『寿岳文章集』(彌生書房, 昭和58年), p.202.

- 36) 外山滋比古「福原麟太郎」『別冊英語青年』(研究社, 1984年), p. 18.
- 37) 中島俊郎「寿岳文章と柳宗悦」『民藝』第835号 (2022年7月号), p. 6.
- 38) 寿岳文章・章子「柳宗悦さんとの出会い」『父と娘の歲月』(人文書院, 1988), pp. 154.
- 39) 式場隆三郎『脳室反射鏡』(高見澤木版社, 1939), p. 123.
- 40) 「寿岳文章氏は……モリスの私版への最も深い研究者である。……寿岳氏の如く日夜書物工芸に精進している私版家はわが国には他にない。同氏によってモリスの大業が正しく紹介され批判されたことは日本の書物工芸のために深い喜びがある。」式場隆三郎「書評『モリス記念論集』」『帝大新聞』第550号 (昭和9年11月9日)
- 41) 寿岳文章・章子「チフス騒ぎ」『父と娘の歲月』, pp. 102-3.
- 42) 『式場隆三郎 [脳室反射鏡] 展図録』(新潟市美術館, 2021), pp. 132-33. 伊藤長蔵からの寄贈本, とくに「新ぐろりあ叢書」については別稿で論じたい。
- 43) 田村耕介「寿岳文章先生の言葉」『クレセント』第5号 (関西学院, 第3巻2号), pp. 142-43.
- 44) イギリス書誌学会の用箋に認められたマッケンロウからの学会の説明と入会を許可する寿岳宛書簡 (1931年10月30日付) が向日市立文化資料館に収蔵されている向日庵資料にある。「1894年5月から1914年1月まで, 会員は300名に限定されていたが, 現在では500名を超える会員を擁している。本会の目的は, 会員のために, 書誌学のさまざまな側面を扱った書籍, 論文を出版し, また論文を発表する会合を開き, 書誌保存館を設立し, 一般に書誌学の研究を促進, 奨励することにある」と案内には記されている。寿岳文庫「欧米の書誌学会」『書物の道』(書物展望社, 昭和9年), pp. 179-88.
- 45) 寿岳文章「書誌学と私—マッケンロウ博士の思い出」『関西学院新聞』(昭和26年6月25日)
- 46) 寿岳文章「エリオットの足あと」『読売新聞』(昭和40年1月7日)。寿岳は本詩集を, 「作者の感性の鋭さ, 理智の深さ, 生活の真面目さが『願はくは』におけるほど独自の表現を示し得た例は, はなはだ稀であろうと存じます。……私はこの詩集が, つきつめて物を考える少数の熱心な愛読者を必ず惹きつける, と難く信じている。それらの人々から真摯な批評を聞き得るならば, 作者と刊行者のつつましい願いは足るでしょう」(「私版だより抄」『紙障子』[靖文社, 昭和17年], p. 209.) と評価している。
- 47) 寿岳文章「書物の美学」『別冊太陽本之美』(平凡社, 1986), p. 9.
- 48) 草森紳一『本の読み方—墓場の書齋に閉じこもる』(河出書房新社, 2009), p. 156. 早稲田大学仏文学教授, 吉江喬松より台湾行きをすすめられ, 南方文学の樹立を願った西川満は, 山内義雄から台北帝大の島田謹二, 矢野峰人を紹介され, 「エキゾティズムの花束」を日本々土へ贈ろうと決意した。女神, 聖母を意味する誌名をもつ, 詩画誌『媽祖』(昭和9年9月—昭和13年3月)を刊行した西川は, 終刊の辞に「通巻全16冊, 洋の東西の愛書家歓喜の中に, 所期の目的を達成し, 本号を以て終刊せんとす」と認めた。
- 49) 寿岳文章『『上方』復刻の文化的意義』『上方 目次パンフレット』(新和出版, 昭和44年10月1日)。「『上方』の「兼葎堂号」(第146号, 昭和18年3月)によれば, 学問と趣味に没頭した兼葎堂は, 「その蔵儲が豊富に眼福は俗になるにつけ, 治賢博識, 人にも教え, 己にも楽しんだ。……生涯は全く趣味と好事で始終したが, その背景には学問と見識があって, 殊に博物学は彼の本領であった」(p. 144)と南木芳太郎は紹介しているが, まさに自らが編集していた『上方』と重なるものであった。
- 50) 久山康「序」『読書の伴侶』(創文社, 昭和39年), pp. 3-4.
- 51) 逆に与謝野晶子の歌「きみ死にたまふことなかれ」に対して, 「晶子がこの詩で歌っているのは, 『家』が絶対主義国家によって踏みにじられてしまうことへの抗議であり, まだ人間への自覚が萌芽していません。しかし, 明治の自由主義の空気の中とはいえ, 日露戦争中に敢然と自分の信念を表白し, 戦争を『けもの道』と呼んだ勇氣には, 深く心を打たれます。」と寿岳は高く評価している。また戦争中にその詩がスローガンとして使われた宮沢賢治の作品を, 「賢治の書いたものには, 仏教的諦観の筋金がいって爽快感です。戦争中にもあの刻苦耐乏の面が買われたわけだが, 彼の本質は何もファッション的なものつながらってはいません。どんな時代がきても, 彼は日本的作家のよい方の代表の一人として残るでしょう」と肯定的に評価している。(『読書の伴侶』, pp. 111-12, pp. 147-48.)
- ロダンの影響については, 高見順との対談における高村光太郎の発言に注目したい。「[高見] あの時パリにいた若い日本の画家たちといっしょに一度ロダンの家へいかれたことがあるんじゃないですか。[高村] (ロダンは留守で) 奥さんが案内してくれてね, とてもよかったです。ロダンの部屋へ入り込んで, ロダンのすわるイスへ腰掛けて, ロダンになったような気がして。」高見順「対談者, 高村光太郎 わが生涯」『対談 現代文壇史』(筑摩書房, 1976), p. 97. どうやら当時, 矢野峰人, 竹友藻風といった親しい英文学者たちが戦争詩を書いていたことを, 寿岳は知らなかったようだ。大日本詩人協会編『大日本詩集 聖戦を歌ふ』(欧文社, 昭和17年), pp. 51-65.
- 52) 寿岳文章「書物の愉しさ」『日本古書通信』第310号 (日本古書通信社, 1970年2月15日)
- 53) 寿岳文章「私の蔵書整理法」『英語青年』第103巻2号 (研究社, 1957年2月1日)
- 54) 寿岳文章「大東亜共栄圏と国語の地位」『関西学院大学新聞』(1942年2月20日)